

清水哲郎¹⁾ (1東京大). 高齢 CKD 患者の治療選択に関する意思決定支援ツールの作成. 第 59 回日本透析医学会学術集会・総会. 神戸, 6月.

5) 三浦靖彦. 日本版 POLST について (基本姿勢). 日本臨床倫理学第 3 回年次大会. 東京, 3月.

IV. 著 書

1) 根本昌実, 佐々木敬. 第 6 章: 特別な配慮を必要とするケース D. 特殊な病態における糖尿病治療 1. 外科手術, ICU での管理. 永井良三 (自治医科大学) 総監修. 糖尿病研修ノート. 改訂第 2 版. 東京: 診断と治療社, 2014. p.502-6.

2) 三浦靖彦. 第 8 章: 医療倫理としての考え. 横浜市医師会編. 終末期の医療: 長高齢社会に向けての心構え (横浜市医師会医学シリーズ: 第 31 集). 横浜: 横浜市医師会, 2014. p.55-63.

V. その他

1) 大野岩男. (ランチョンセミナー13) 高尿酸血症と CKD・CVD との関連 UPDATE. 第 87 回日本内分泌学会学術総会. 福岡, 4月.

2) 大野岩男. (ランチョンセミナー28) 高尿酸血症と高血圧・CKD との関連. 第 57 回日本腎臓学会学術総会. 横浜, 7月.

精神医学講座

教授: 中山 和彦	精神薬理学, てんかん学
教授: 伊藤 洋	精神生理学, 睡眠学
教授: 中村 敬	精神病理学, 森田療法
教授: 宮田 久嗣	精神薬理学, 薬物依存
教授: 須江 洋成	臨床脳波学, てんかん学
准教授: 忽滑谷和孝	総合病院精神医学
准教授: 山寺 亘	精神生理学, 睡眠学
准教授: 小曾根基裕	精神生理学, 睡眠学
准教授: 小野 和哉	精神病理学, 児童精神医学
講師: 塩路理恵子	精神病理学, 森田療法
講師: 館野 歩	森田療法, 比較精神療法
講師: 伊藤 達彦	総合病院精神医学, 精神腫瘍学
講師: 中村 晃士	精神分析的精神医学, 児童思春期精神医学
講師: 角 徳文	老年精神医学
講師: 古賀聖名子	精神薬理学, 質の心理学
講師: 川村 諭	精神薬理学

教育・研究概要

I. 精神病理・精神療法・児童精神医学研究会

我々は, 精神療法と精神病理学的研究, および児童精神医学分野の研究を施行している。我々は精神科の入院治療における発達障害の治療システムを研究している。近年わが国での児童思春期精神障害症例に特化された専門治療施設は限られているのが現状である。しかし児童思春期の精神障害は一般の精神科外来で対応されることが常態化してきている。またこのような事例は一部入院症例として一般病棟でもある程度対応されていることと考えられる。そこでこのような児童症例の治療には症例に特化した治療技法が求められる。それゆえ我々は2000年から, 児童思春期精神障害事例の一般精神科病棟で治療的対応技法について156症例を集積して検討してきた。その結果, 一般病棟で児童思春期症例に対応するための新しい治療の方略が明らかになった。また, 発達障害と精神障害に共通する「注意障害」に関してその相違の研究を進めている。この結果, 統合失調症に比して自閉症スペクトラムでは1つのことに集中を維持する機能は保たれるものの, いくつものタスクが加わると, 注意・集中の維持が困難になる傾向があることが明らかになってきた。精神療法分野では, 従来から研究している DBT (弁証法的行動療法) の日本での汎用化のための技法の開発を進め

ている、また自閉症に関する構造化治療法であり患者の自己評価を維持し、認知機能を高める日記療法を開発した。

II. 森田療法研究会

若手精神科医に向けた基本的な面接技法の研修プログラム・教材を、他学派の精神療法家と共同で開発している。また森田療法と“第三世代”の認知行動療法との比較研究を推進し森田療法の思春期例に対する応用について実践的研究を開始した。さらに今年度も社交不安障害の精神病理学的研究、入院森田療法におけるうつ病の回復要因についての研究、森田療法の緩和医療への応用についての実践的研究を継続した。

III. 薬理生化学研究会

基礎研究では、げっ歯類を用い1.脳内透析法およびラジオイムノアッセイ法を用いた新規向精神薬のモノアミン神経伝達への影響に関する研究、2.薬物依存の形成機序に関する研究、3.薬物依存に関連する衝動行為の神経基盤に関する研究および、4.薬物依存に対する抗渴望薬の開発に関する研究を行った(2, 3, 4はNTTコミュニケーション科学基礎研究所と専修大学大学院文学研究科心理学部門との共同研究)。臨床研究では、1.統合失調症の回復期を予測する生育・心理・社会的因子に関する研究、2. positron emission tomographyを用いた、抗精神病薬のドパミントランスポーター密度に与える影響に関する研究(放射線医学総合研究所との共同研究)、3.抗精神病薬による脳内ドパミンD2/3受容体を介した顕現性回路の制御機構の解明に関する研究、4.統合失調症の服薬アドヒアランスに関する質的研究、5.修正型電気けいれん療法の奏功機序にかかわる遺伝子発現調節因子に関する研究、6.月経関連症候群、非定型精神病、急性精神病の病態に関する研究を行った。薬理生化学研究会では、基礎と臨床を統合した研究を行っている。

IV. 精神生理学研究会

1.睡眠医療プラットフォームを用いて実施する臨床研究ネットワーク、運用システム、リソースの構築に関する研究、2.臨床評価を踏まえた睡眠障害の治療ガイドライン作成および難治性の睡眠障害の治療法開発に関する研究、3.不眠症を対象とした認知行動療法による睡眠構造および自律神経活動に与える影響、4.慢性不眠症あるいはうつ病の不眠症状に対する認知行動療法の有効性に関する研究、

5.客観的疲労評価測定による閉塞型睡眠時無呼吸症候群の重症度評価に関する検討、などを継続あるいは新規に着手した。

V. 老年精神医学研究会

認知症患者や老年期の精神疾患患者に対して、脳画像検査と神経心理検査を行い、精神症状や社会認知障害の神経基盤を明らかにする一連の研究を行っている。1つの研究ではアルツハイマー病(AD)の病識低下に注目し、神経変性に対する代償機構がどのようにADの病識に関与するかを検討した。結果としては、病識低下は右前頭葉の機能低下からくる遂行機能障害および、それを代償するための左頭頂後頭連合野の意味記憶システムの活性化と関連することが明らかとなった。また高齢の身体表現性障害の患者において、大脳白質病変(WMHs)が重度な患者は、疾患の重症度も高く、さらに遂行機能も低下していたことが明らかとなり、これは身体表現性障害の新たな病因と考えられ、予後および治療に関しても示唆的な所見であった。今後はさらに縦断的なフォローアップを行い、これらの症候の日常生活に与えるインパクトについての研究を行う予定である。

VI. 総合病院精神医学研究会

うつ病の再発予防教育では、ビデオ教材をスライド化し、より柔軟に患者のニーズに対応した。効果判定の心理検査では、認知・行動・感情の3側面と総合的なパーソナリティの測定に加え、うつ病の寛解期における睡眠状態を把握する目的で、新たに睡眠評価尺度も取り入れた。また、最近増加しているパーソナリティの未成熟性や偏りが存在する症例や双極性うつ病にも対応するプログラムを検討した。末期患者に対する終末期医療(緩和ケア)では、癌センター東病院との数年来の共同研究により、がん患者、その家族、および遺族の心理的課題に関する研究を行った。さらに、入院患者やスタッフから要請を受けて、臨床心理士を中心とした精神科スタッフがメンタルサポートを開始した。

原発性消化器がんの術後せん妄のリスクファクターに関する研究を行っている。

VII. 臨床脳波学研究会

妊娠中のでんかん例における新規抗てんかん薬の血中濃度変化が検討され報告がなされた。今後もてんかん合併女性の妊娠に関する臨床的研究を広く進める予定である。また、臨床・脳波学的に興味深い

症例については随時報告を行ってきたが、本年度は反射性に発作が誘発され特異な臨床経過を示したてんかん症例について報告した。その他の進行中の研究として、精神症状を有するてんかんの薬物治療の安全性と有効性に関する研究、そしててんかんに合併した抑うつ発症の再発予防に関する研究がある。

Ⅷ. 臨床心理学研究会

2014年度も心理療法の技法の向上を図るために、症例検討を継続して行った。また、認知行動療法、森田療法、緩和ケア、サイコオンコロジー、社会技能訓練などのさらなる学習を行った。心理テストについては、発達障害、高次脳機能障害を中心に研究をすすめた。慈恵心理臨床の集い(研究会)では、黒川由紀子先生を招聘し、「高齢者の心理療法」についてのご講演を賜り、「高齢者の心理療法」の実際の臨床場面への応用を学ぶことができた。このような臨床・研究活動のみならず、心理研修生を受け入れ、心理学的教育に積極的に取り組んだ。

「点検・評価」

2014年度においても、8部門の研究会からなる研究活動を行い、基礎的研究から臨床研究まで幅広い方法論で研究活動を行った。このことは、脳科学から精神療法まで幅広い知識が必要とされる精神科治療を実践するに際して望ましい研究体制にあるといえる。本年度は、これに加えて、児童期から老年期まで幅広い疾患に対して、それぞれの研究会が専門外来を開設したり、異なった研究班が共同して研究活動や治療体制を設けるようになった。このことは、医学科における研究と臨床のあり方として望ましく、また、教育の観点からも良好な結果が期待される。研究活動においては、従来通り、それぞれの研究会が積極的に研究費を獲得して研究を行い、活発な学会発表がなされている。しかし、原著論文、特に、学術的に権威のある国際誌などへの投稿は多いとはいえ、今後、より厳密な研究計画に基づいた独創的な研究が求められる。さらに、各研究部門での独立した研究テーマにとどまらず、教室全体として大きな研究目標を設け、基礎と臨床のジョイントした研究を計画する必要性を感じている。

研究業績

I. 原著論文

- 1) Takano H¹⁾, Arakawa R¹⁾, Nogami T¹⁾, Suzuki M¹⁾, Nagashima T¹⁾, Fujiwara H¹⁾, Kimura Y¹⁾, Kodaka F¹⁾, Takahata K¹⁾, Shimada H¹⁾, Murakami

Y (Shiga Univ), Tateno A²⁾, Yamada M¹⁾, Ito H¹⁾, Kawamura K¹⁾, Zhang MR¹⁾, Takahashi H¹⁾, Kato M (Keio Univ), Okubo Y²⁾ (²Nippon Medical School), Suhara T¹⁾ (¹National Institute of Radiological Sciences). Norepinephrine transporter occupancy by nortriptyline in patients with depression: a positron emission tomography study with (S,S)-[¹⁸F] FMeNER-D₂. *Int J Neuropsychopharmacol* 2014; 17(4): 553-60.

- 2) Ito H¹⁾, Shinotoh H¹⁾, Shimada H¹⁾, Miyoshi M¹⁾, Yanai K²⁾, Okamura N²⁾ (²Tohoku Univ), Takano H¹⁾, Takahashi H¹⁾, Arakawa R¹⁾, Kodaka F¹⁾, Ono M¹⁾, Eguchi Y¹⁾, Higuchi M¹⁾, Fukumura T¹⁾, Suhara T¹⁾ (¹National Institute of Radiological Sciences). Imaging of amyloid deposition in human brain using positron emission tomography and [¹⁸F] F-18-FACT: comparison with [¹¹C] PIB. *Eur J Nucl Med Mol Imaging* 2014; 41(4): 745-54.

- 3) Ito H¹⁾, Shimada H¹⁾, Shinotoh H¹⁾, Takano H¹⁾, Sasaki T¹⁾, Nogami T¹⁾, Suzuki M¹⁾, Nagashima T¹⁾, Takahata K¹⁾, Seki C¹⁾, Kodaka F¹⁾, Eguchi Y¹⁾, Fujiwara H¹⁾, Kimura Y¹⁾, Hirano S¹⁾, Ikoma Y¹⁾, Higuchi M¹⁾, Kawamura K¹⁾, Fukumura T¹⁾, Bōō ÉL²⁾, Farde L²⁾ (²Karolinska Institutet), Suhara T¹⁾ (¹National Institute of Radiological Sciences). Quantitative analysis of amyloid deposition in Alzheimer disease using PET and the radiotracer ¹¹C-AZD2184. *J Nucl Med* 2014; 55(6): 932-8.

- 4) Tagai K, Nagata T, Shinagawa S, Nemoto K (Univ of Tsukuba), Inamura K, Tsuno N, Nakayama K. Correlation between both morphologic and functional changes and anxiety in Alzheimer's disease. *Dement Geriatr Cogn Disord* 2014; 38(3-4): 153-60.

- 5) Inamura K, Shinagawa S, Nagata T, Tagai K, Nukariya K, Nakayama K. Cognitive dysfunctions in patients with late-life somatic symptom disorder: a comparison according to disease severity. *Psychosomatics* 2015; 56(5): 486-94. Epub 2014 Oct 8.

- 6) Shibata N, Nagata T, Tagai K, Shinagawa S, Ohnuma T, Kawai E, Kasanuki K, Shimazaki H, Toda A, Tagata Y, Nakada T, Nakayama K, Yamada H, Arai H. Association between the catechol-O-methyltransferase polymorphism Val158Met and Alzheimer's disease in a Japanese population. *Int J Geriatr Psychiatry* 2015; 30(9): 927-33. Epub 2014 Dec 9.

- 7) Shinagawa S, Nakajima S¹⁾²⁾³⁾, Plitman E²⁾³⁾, Graff-Guerrero A²⁾³⁾ (²Centre for Addiction and Mental Health, ³Univ of Toronto), Mimura M¹⁾ (¹Keio Univ), Nakayama K, Miller BL (Univ of Cali-

- fornia). Non-pharmacological management for patients with frontotemporal dementia: a systematic review. *J Alzheimers Dis* 2015; 45(1): 283-93.
- 8) Shinagawa S, Naasan G¹⁾, Karydas AM¹⁾, Coppola G¹⁾, Pribadi M¹⁾, Seeley WW¹⁾, Trojanowski JQ (Univ of Pennsylvania), Miller BL¹⁾, Grinberg LT¹⁾ (¹Univ of California). Clinicopathological study of patients with C9ORF72-associated frontotemporal dementia presenting with delusions. *J Geriatr Psychiatry Neurol* 2015; 28(2): 99-107.
- 9) Nagata T, Kobayashi N, Ishii J, Shinagawa S, Nakayama R, Shibata N¹⁾, Kuerban B¹⁾, Ohnuma T¹⁾, Kondo K, Arai H¹⁾ (¹Juntendo Univ), Yamada H, Nakayama K. Association between DNA methylation of the BDNF promoter region and clinical presentation in Alzheimer's disease. *Dement Geriatr Cogn Disord Extra* 2015; 5(1): 64-73.
- 10) Inamura K, Tsuno N, Shinagawa S, Nagata T, Tagai K, Nakayama K. Correlation between cognition and symptomatic severity in patients with late-life somatoform disorders. *Aging and Mental Health* 2015; 19(2): 169-7.
- 11) Shinagawa S. Neuropsychiatric management of young-onset dementias. *Psychiatr Clin North Am* 2015; 38(2): 323-31. Epub 2015 Feb 27.
- 12) 小野和哉, 塩谷美紀, 中山和彦. 摂食障害の世代間の相違と摂食障害の精神病理. *心身医* 2014; 54(10): 916-21.
- 13) 中村 敬. 精神療法にできないこと, できること. *臨精病理* 2014; 35(1): 39-46.
- 14) 互 健二, 品川俊一郎, 加田博秀, 永田智行, 稲村圭亮, 角 徳文, 中山和彦. 病名告知によりうつ状態が悪化し, ガラントミンの投与がその改善に有効であったアルツハイマー病の1例. *老年精医誌* 2014; 25(11): 1254-59.
- 15) 品川俊一郎, 矢田部裕介¹⁾, 繁信和恵 (浅香山病院), 福原竜治¹⁾, 橋本 衛¹⁾, 池田 学¹⁾ (¹熊本大), 中山和彦. 本邦におけるFTDに対するoff-label処方の実態について. *Dementia Jpn* 2015; 29(1): 78-85.
- 16) 中村晃士, 沖野慎治, 小野和哉, 中山和彦. 発達障害患者における身体化の三重構造. *心身医* 2014; 54(12): 1105-10.
- 17) 中山和彦. 座敷牢から生還した新吉, その眼光 中原中也の哀しみの詩が共鳴する. *日病跡誌* 2014; 88: 4-19.
- 18) 中村 敬. 【うつ病治療における行動活性化-「休息と薬物療法」を超えていかに導入するか-】うつ病の森田療法 いつ, いかにして行動を促すか. *精神誌* 2015; 117(1): 34-41.
- 19) 小崎香織 (総武病院), 小高文聰. 精神科長期入院患者のアセスメント (DRIの実践). *社精医研紀* 2015; 43(1): 10-4.

II. 総 説

- 1) 山寺 亘. 【長距離移動の旅行医学】旅行と眠り時差対策. *日旅行医学会誌* 2014; 11(1): 30-3.
- 2) 忽滑谷和孝. 生活習慣病とメンタルヘルス. *日職災医学会誌* 2014; 62(5): 316-21.
- 3) 品川俊一郎, 繁田雅弘 (首都大学東京). 【アセチルコリンと神経疾患-100年目の現在地】アルツハイマー病の治療. *Brain Nerve* 2014; 66(5): 507-16.
- 4) 中村 敬. 自殺予防につながるサイコセラピー〜森田療法の視点から〜. *日サイコセラピー会誌* 2014; 15(1): 79-83.
- 5) 小高文聰, 須原哲也. 【職場のメンタルヘルス対策 Q&A】精神科診断 産業保健における画像診断の応用は? 産業精保健 2014; 22(特別): 29-31.
- 6) 山寺 亘, 伊藤 洋. 睡眠障害の診断と治療. *東京病薬師雑誌* 2014; 63(6): 491-7.
- 7) 中山和彦. 【女性のアンチエイジング】こころのアンチエイジング 女性がうつや不安にならないためには. *Mod Physician* 2014; 34(11): 1313-5.
- 8) 川村 論, 中山和彦. 目で見えるエストロゲンの生殖器外作用 エストロゲンと脳機能. *HORM FRONT GYNECOL* 2014; 21(4): 256-7.
- 9) 忽滑谷和孝. 【高齢者ケアの現状と将来】高齢者の社会保障・経済的資源の現状. *老年精医誌* 2015; 26(2): 138-45.
- 10) 品川俊一郎. 【神経認知障害群 (NCD) の神経認知領域; その概念と評価をめぐる現状と課題】学習と記憶 その概念と評価法. *老年精医誌* 2015; 26(3): 257-63.

III. 学会発表

- 1) Shinagawa S, Catinding JA, Block N, Miller B, Rankin K. When a little knowledge can be dangerous: false positive diagnosis of bvFTD among community clinicians. 9th International Conference on Frontotemporal Dementias. Vancouver, Oct.
- 2) Yamadera W, Morita M, Osaku E, Kuroda A, Obuchi K, Itoh H, Nakayama K. Clinical study of escitalopram monotherapy for major depressive disorder with insomnia-A preliminary study-. 6th World Congress on Sleep Medicine. Seoul, Mar.
- 3) 杉田ゆみ子, 青木啓仁, 塚原準二, 岩下正幸, 稲村圭亮, 小堀聡久, 永田智行, 落合結介, 小川佳那, 古川はるこ, 忽滑谷和孝, 中山和彦. 婦人科癌に罹患し精神科の受診に至った40歳代未妊女性の2例. 第

- 19 回千葉総合病院精神科研究会. 千葉, 4月.
- 4) 落合結介, 小堀聡久, 忽滑谷和孝, 伊藤達彦, 高橋直人, 河原秀次郎, 柳澤 暁, 中山和彦. 消化器がん患者の術後せん妄に影響を及ぼす精神医学的因子に関する研究 (第2報). 第110回日本精神神経学会学術総会. 横浜, 6月.
- 5) 小豆島沙木子, 真鍋貴子, 平林万紀彦, 川村 諭, 忽滑谷和孝, 中山和彦. 難治性疼痛性障害に対して修正型電気けいれん療法 (m-ECT) が有効であった4症例. 第110回日本精神神経学術総会. 横浜, 6月.
- 6) 稲村圭介, 品川俊一郎, 角 徳文, 永田智行, 互健二, 忽滑谷和孝, 中山和彦. 老年期身体表現性障害における認知機能障害. 第29回日本老年精神医学会総会. 東京, 6月.
- 7) 齊藤健一郎, 浮地太郎, 高木明子, 伊藤達彦, 忽滑谷和孝, 中山和彦. SLEの治療中に多彩な精神症状を呈したステロイド精神病の一例. 第27回日本総合病院精神医学会総会. つくば, 11月.
- 8) 湯澤美菜, 小川佳那, 塚原準二, 稲村圭亮, 小堀聡久, 落合結介, 古川はるこ, 森田道明, 忽滑谷和孝, 笠原洋勇, 中山和彦. 重症交通外傷のリエゾン症例における精神療法. 第110回日本精神神経学会学術総会. 横浜, 6月.
- 9) 山寺 亘, 原田大輔. (シンポジウム7: 睡眠障害に対する非薬物療法の本質) 不眠症に対する認知行動療法における睡眠時間制限法. 日本睡眠学会第39回定期学術集会. 徳島, 7月.
- 10) 山寺 亘. 慢性不眠症に対する認知行動療法の効果—個人療法と集団療法の比較—. 第14回日本認知療法学会・第18回日本摂食障害学術集会合同学会. 大阪, 9月.
- 11) 中山和彦. キュブラー・ロスはモーツァルトのレクイエムを知っていたのか. 港区医師会精神科医会講演会. 東京, 4月.
- 12) 中山和彦. 女性とうつ. 第3回信州不安・抑うつ研究会. 長野, 4月.
- 13) 中村 敬. 創傷応激と森田療法. 第10回中国森田療法学術大会. 石家庄, 5月.
- 14) 互 健二, 品川俊一郎, 加田博秀. 病名告知によりうつ状態が悪化し, ガランタミンの投与が奏功したアルツハイマー病の1例. 第29回日本老年精神医学会総会. 東京, 6月.
- 15) 中山和彦. (会長講演) 座敷牢から生還した新吉, その眼光—中原中也の哀しみの詩が共鳴する. 第61回日本病跡学会総会. 東京, 7月.
- 16) 中村 敬. (シンポジウム8: うつ病の精神療法再考) 森田療法の立場から. 第11回日本うつ病学会総会. 広島, 7月.
- 17) 中村 敬. 森田療法—今日の実践状況と問題提起—. 第14回日本認知療法学会・第18回日本摂食障害学術集会合同学会. 大阪, 9月.
- 18) 川口拓之, 島田 斉, 小高文聰, 鈴木雅之, 篠遠 仁, 平野成樹, カーショウ・ジェフ, 須原哲也, 伊藤 浩. ドパミントランスポーターPETとニューロメラニンMRIによる黒質のパーキンソン病態生理の複合解析. 第54回日本核医学会学術総会. 大阪, 11月.
- 19) 関 千江, 徳永正希, 小高文聰, 前田 純, 木村泰之, 田桑弘之, 生駒洋子, 須原哲也, 樋口真人, 伊藤浩. ハロペリドール急性投与によるラット線条体へのドーパミントランスポーターリガンド [¹⁸F] FEPE21の結合変化. 第54回日本核医学会学術総会. 大阪, 11月.
- 20) 中山和彦. (会長講演) まっすぐ・届く・森田療法—その軌跡をたどる. 第32回日本森田療法学会. 東京, 11月.

IV. 著 書

- 1) Shinagaawa S, Miller BL (Univ of California). Chapter 69: Frontotemporal dementia. In: Rosenberg RN, Pascual JP, eds. Rosenberg's Molecular and Genetic Basis of Neurological and Psychiatric Disease. 5th edition. London: Academic Press, 2014. p.779-92.
- 2) 小高文聰, 中山和彦. Part 3: デュロキセチンの開発と臨床薬理 2. デュロキセチンの薬理学的プロファイルと作用機序—5-HT, NA トランスポーター占有率, 他のSNRIとの違い. 村崎光邦 (CNS薬理研究所, 北里大) 監修, 小山 司 (北海道大, 大谷地病院), 樋口輝彦 (国立精神・神経医療研究センター) 編. デュロキセチンのすべて. 東京: 先端医学社, 2014. p.85-9.
- 3) 中村 敬, 北西憲二 (森田療法研究所, 北西クリニック). 第13章: 外来森田療法のガイドライン. 北西憲二編著. 森田療法を学ぶ: 最新技法と治療の進め方. 東京: 金剛出版, 2014. p.175-88.
- 4) 中村 敬. I. 森田療法で読む「強迫性障害」 2. 強迫性障害の病理と治療選択. 北西憲二 (森田療法研究所, 北西クリニック), 久保田幹子 (法政大) 編. 森田療法で読む強迫性障害: その理解と治し方. 東京: 白揚社, 2015. p.32-56.
- 5) 品川俊一郎. I. 神経認知障害群 物質・医薬品誘発性認知症 (DSM-5) または物質・医薬品誘発性軽度認知障害 (DSM-5), HIV感染による認知症 (DSM-5) またはHIV感染による軽度認知障害 (DSM-5). 神庭重信 (九州大) 総編集, 池田 学 (熊本大) 編. DSM-5を読み解く: 伝統的精神病理, DSM-IV, ICD-10をふまえた新時代の精神科診断5: 神経認知障害群, パーソナリティ障害群, 性別違和, パラフィリア障害群, 性機能不全群. 東京: 中山書店, 2014. p.87-94.

V. その他

- 1) 中山和彦. 双極性障害の治療/まっすぐ・届く・森田療法. 第34回 TAKATSU PSYCHIATRISTS' MEETING (帝京大学医学部附属溝口病院). 川崎, 3月.
- 2) 中山和彦. 井上円了と森田正馬. ともしび 2014; 58(4): 2-11.
- 3) 中山和彦. 病跡学の有用性~精神病理学における意義~. CNS フロンティア 2014; 1-3.
- 4) 中山和彦. 対談によせて1: 座敷牢からの叫び-五億年たったら帰ってくる-. Magazine of Atypical Antipsychotic Revolution Therapeutic Aspects 2014; 11-7.
- 5) 中山和彦. 精神科薬物療法の適正化-新規抗うつ薬の動向を踏まえて-. DEPRESSION コンパクトガイド 2014; 3-5.

小児科学講座

- | | |
|------------|-------------------------|
| 教授: 井田 博幸 | 先天代謝異常 |
| 教授: 大橋 十也 | 先天代謝異常
(遺伝子治療研究部に出向) |
| 教授: 浦島 充佳 | 臨床疫学
(分子疫学研究部に出向) |
| 准教授: 宮田 市郎 | 小児内分泌学 |
| 准教授: 和田 靖之 | 小児感染免疫学 |
| 准教授: 勝沼 俊雄 | 小児アレルギー学 |
| 准教授: 加藤 陽子 | 小児血液腫瘍学
(輸血部に出向) |
| 准教授: 斎藤 義弘 | 小児感染免疫学 |
| 准教授: 小林 博司 | 先天代謝異常
(遺伝子治療研究部に出向) |
| 講師: 藤原 優子 | 小児循環器学 |
| 講師: 田知本 寛 | 小児アレルギー学 |
| 講師: 秋山 政晴 | 小児血液腫瘍学 |
| 講師: 小林 正久 | 先天代謝異常・新生児学 |
| 講師: 浦島 崇 | 小児循環器学 |

教育・研究概要

I. 代謝研究班

本年度もライソゾーム蓄積症, 多発奇形, 精神発達遅滞に対する研究を行った。ムコ多糖症II型の骨髄移植においてモデルマウスを用いてドナーキメリズムと治療効果の関係を血液斑と共同で明らかにし, 更に抗c-Kit抗体の骨髄移植の前処置として有効性も明らかにした。ポンペ病モデルマウスにより酵素製剤の経口投与が酵素補充療法における免疫反応を抑制することを明らかにした。また本症のヒトiPS細胞より分化させた心筋細胞を用いて遺伝子治療の有用性を示すと共に, メタボローム解析を行いポンペ病iPS細胞由来心筋細胞では酸化グルタチオンが上昇しており, 酸化ストレスの存在を明らかにした。今回も基礎研究では一定の成果が出たが, 今後はこれらのシーズをいかに臨床応用するかトランスレーショナルな検討が必要と思われた。また多発奇形, 発達遅滞に関してマイクロアレイCGH, エクソーム解析を診断に応用した。

II. 神経研究班

本年度は臨床研究を中心に行った。6歳未満発症の低酸素性脳症後遺症の長期予後に関する検討では, 精神運動障害の重複合併が多く画像検査では広範な脳損傷を認めた。今後これらの障害にして適切な在宅医療および患者家族支援の在り方を確立していく。てんかん重積状態に対するfosphenytoinの有用性